鳥の目 虫の目

拍手の雄弁

川島 健司

プロ野球、Jリーグ、大相撲といったプロスポーツに観客が戻ってきた。もちろん人数制限はあるが、幸いこれまでのところ、「試合（取組）の観戦による新型コロナウイルス感染」の報も聞かない。選手、力士にとっても、それ以前に無観客（Jリーグ流に言えばリモートマッチ）を経験しているだけに、大声や歌はなくても、ファンの拍手による応援はとてもありがたく感じられるようだ。

拍手といえば、印象に残っているのが、英国に駐在していたころにしばしば目にしたサッカーのプレミアリーグでの光景だ。試合中に激しい接触があって選手が倒れ、ピッチに担架が入る。プレー続行が不可能になった選手がそれに乗って運ばれていくとき、両チームのサポーターから大きな拍手があがるのだ。立ち上がってする人も少なくない。

「ひどいけがじゃないといいな」。「早く治して戻って来いよ」。ひいきのクラブに関係なく、サッカーを愛する人たちのそんな思いが、スタジアム全体から拍手の音と共にひたひたと伝わってくる。手をたたくという行為は雄弁だ。同じ欧州でも、ほかの国でこれほどの拍手はあまり記憶にないから、これは英国の一つの文化なのだろう。

日本でも、例えば小欄がネット観戦していた先月22日のJ1札幌―F東京戦では、F東京の東が担架で途中交代したとき、札幌ドームの大半を占めていたであろうホームのサポーターからの拍手が聞こえてきた。

大声や楽器演奏のない応援では、相手チームへのブーイングや相手選手の集中をそぐような行為は、やりようがない。観客がまばらな現状は寂しくもあるが、場面に応じて拍手で選手をたたえ、励ましていくという新しいスポーツ観戦の文化が確立されていくならば、それはそれで意味があることだと思う。

（編集委員）

（「鳥の目 虫の目」は次回から夕刊に掲載します）